

# 歴史まち歩き

# 武蔵や芭蕉、森の石松など 無数の旅人が行き通った東海道最大の宿場町

1

## 東海道 宮宿

コース【地下鉄伝馬町駅▶地下鉄伝馬町駅】

江戸から京へ、東海道五十三次は鳴海宿から笠寺を経由して、いよいよ41番目の宿場、宮宿(みやのしゆく)に入ります。宮とはもちろん熱田神宮のこと。熱田は尾張名古屋の城下町から離れた別のまちで、その先は、東海道でただ一カ所の海路、桑名へ向かう「七里の渡し」です。熱田神宮の門前町であり、行き交う旅人で大いに賑わった東海道最大の宿場町であり、そこに多くのドラマが生まれました。

### 1 裁断橋跡地(姥堂うぼどう)

秀吉が天下統一を果たした小田原の北条氏攻めに陣出して戦死した堀尾金助を供養するために、母がここにあった精進川に架かる橋を架けて菩提を弔いました。この橋で陣前の息子を見送ったからです。裁断橋の擬宝珠(ぎぼし)には「十八になる子をたたせてよ、又二目とも見ざる、悲しみのあまりに、いまこの橋を架けるなり」とあり、経緯を伝えています。実物は名古屋市博物館にあります。跡地(姥堂境内)には復元された擬宝珠があります。姥堂は時宗の寺院で、オンパコさんとも呼ばれています。

### 2 都々逸(どどいつ)発祥之地碑

寛政12年(1800年)に「けいはん(鶏飯)屋」という大きな茶屋が開店しました。この茶屋の下女のひとりに「おかめ」という愛嬌をふりまく者がいて人気を集めたために、いつしか宮宿の女郎を「おかめ」と総称するようになりました。その「おかめ」のひとり、神戸(ごうど)町鯛屋の女房・お仲が歌いだした歌が東海道の旅人の口で東西に伝えられました。「おかめ買奴 天窓(あたま)でしれる油つけずのニツ折れ そいつはどいつじゃ どいつじゃ」そのうち最後の二節が訛って「どどいつどいどい浮世はさくさく」と歌われるようになり、多くの新作が生まれました。当社は神戸節(ごうどぶし)と呼ばれていましたが、やがて「どどいつ」と呼ばれるようになりました。

### 3 東海道道標

東海道を、伝馬町を経て旧神戸町の三叉路に至ると、寛政2年に建立された南側の道標にぶつかります。東海道と佐屋道・木曾路の分かれ道で左折すれば七里の渡し場へ、右折すると熱田神宮へ2丁(約218m)の道のりであることを伝えています。

### 4 七里の渡し

七里の渡しは東海道における唯一の海上路で、東海道制定の際に幕府から公式に定められた官道です。距離は7里、渡し船に乗る時間は約4時間でした。海難事故がしばしば発生する難所もありました。陸路の長い旅路の中間に一息入れる地点であり、宮宿と桑名宿は東海道で1、2番の旅籠数であったとされています。現在、渡船場跡(神戸浜)が宮の渡し公園として整備され、犬山城主成瀬正房由来の常夜燈や時の鐘が設置されています。また、近くには江戸時代を偲ばせる民家が2棟残っています。丹羽家住宅はかつて脇本陣、熱田荘は料亭でした。

### 5 丹羽家住宅(昭和59年 市指定文化財)

屋号を「伊勢久」と称し、幕末期には脇本陣格の旅籠屋を営んでおり、西国各藩の名のある提灯箱などがのこります。脇本陣とは、本陣に比べ一段格下で、本陣が一杯のときなどその替わりを務めました。木造二階建、切妻造機瓦葺。幕末の建物とみられます。破風付の玄関を備え、八双金具の板扉も残ります。屋根にうだつがあがっていましたが、現在は袖うだつのみとなっています。「尾張名所図会」に描かれている破風付玄関のある家は当家と思われる。

### 6 熱田荘(昭和60年 市指定文化財)

かつては「魚半」という屋号で魚類を主とする料亭と仕出し屋を営んでいましたが、太平洋戦争中は三菱重工の社員寮として、現在は高齢者福祉施設として利用されていました。木造二階建、切妻造機瓦葺。建造年代は明治29年と新しく、正面の大戸と出格子は失われましたが、構造材はすべて残されており、伝統的町屋の形態を継承して宮宿の近代的景観をしるはせる建物となっています。

### 7 旧魚半別邸(洋館・和館)

洋館は大正13年に、和館は昭和3年にそれぞれ建てられました。平成25年10月には地域の観光拠点である交流センターとして新たにオープンしました。

### 8 赤本陣跡

武家、公家の宿泊施設として、赤・白・脇の3本陣がありました。赤本陣(西本陣ともいう)は神戸町の熱田奉行所の北に、白本陣(東本陣)は伝馬町の中ほどにありました。

### 9 林桐葉(はやしとうよう)宅跡

芭蕉の門人で、熱田の郷士。本名は林七左衛門、俳号が桐葉。貞享元年(1684年)、ふるさとの伊賀上野への旅「野ざらし紀行」で、芭蕉は熱田に立ち寄り、林家に往復2度逗留しました。「この海に草鞋捨てん笠時雨」は、そのときに詠まれた句です。

### 10 熱田神宮・草薙剣

このあたりは熱田台地の南端にあたり、古くは伊勢湾に面した岬に神宮がありました。三種の神器のひとつ、草薙神剣(くさなぎのみつぎ)をご神体とし、社が鎮座されたのは景行天皇の末年頃(2世紀はじめ)とされます。『日本書紀』によるとスサノヲ命(素戔嗚尊)が出雲で倒したヤマタノオロチ(八岐大蛇)の尾から出てきた太刀が天叢雲剣で、剣はスサノヲ命から天照大神に奉納され、天孫降臨の際にニニギ尊(瓊瓊杵尊)に手渡されました。ヤマトタケル命(日本武尊)が伊勢神宮でこの剣を拝受し、東征の際に静岡で野火の難をのがれたために草薙剣の別名を与えました。ヤマトタケル命は東征の帰路、尾張でミヤスヒメ(宮寶姫)を娶ります。ミヤスヒメはこの剣を預り、ヤマトタケル命が三重県の能褒野(のぼの)で死去した後、熱田の地に草薙剣を祀ったとされています。西行法師が腰をかけて休んだといわれる二十五丁橋。織田信長が桶狭間の戦いに向かう際に戦勝祈願を行い、合戦後、勝利の返礼に築いたとされる堀(信長堀)の一部が現存しており、「日本三大土堀」の一つとされています。

